
二百文字詩集「虹色交差点」

那音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二百文字詩集「虹色交差点」

【Nコード】

N8485Z

【作者名】

那音

【あらすじ】

いろんな声を通ります。

君の全部が好きだから

どうしようもなく愛しくて、どうしようもなくほしくて。

君を遠くから眺めていたくて、君を近くに感じていたくて。

君に好きって言いたくて、言えなくて。

どんな言葉を投げかければ、君は振り向いてくれるのかな。

愛してるじゃ足りない。身体中から溢れ出すこの気持ちは、どうすれば伝わるの？

考えても答えはでないんだ。

この気持ちを伝えるには、きつと言葉じゃだめなんだね。

もっと君を好きになれば、勝手に言葉は出てくるのかな。

恥ずかしがり屋

こっち向いて。

だいじょうぶ、こわくないよ。知ってるだろ、そんなこと。

どうしたのさ、顔赤いよ。体調悪いの？

もうずいぶん寒くなってるんだから、風邪なんかひかないようにな。

最近メールも電話もロクにしてないけど、ちゃんと言いたいことわかってるつもりだから。

てか、君は相変わらさずの恥ずかしがり屋だから、こっちが汲み取らないといけないでしょ。

すっかり君に慣れてしまったからさ、もう今更なにがあっても動じやないよ。

笑っちゃいなよ

たとえば考えてる言葉がなにもかも伝わるとしたら、人間の文化で言葉は廃れていくんだろう。

そんな風にさ。泣いてばっかいると、笑い方忘れちゃうよ。

悲しむのも大切だけど、僕はそんな君を笑えないよ。

すこし寂しくても、思い出せればいつだって近くにいてるって思えるはず。

泣き顔が似合う君じゃないからさ。

どんなに辛くても前を向けとは言わないけど、俯いてばっかだと誰かにぶつかるよ。

落ち着いてからでいいから、前向きなせ。

君の道

何回やってもうまくいかないとか、そんな壁にぶつかったとしてさ。

そこでしぶとく続けられるか、あきらめちゃうか、君はさあどっちだろう。

そうだよ、進むことだけが正解じゃないさ。正解は、ひとつじゃない。

だからこそ人はそれぞれに最善の道を見いだして、そこに進んでいくんじゃないかな。

間違いとかじゃなくて、それが一番君らしいってやり方。

それは1人で探すのは難しいだろうから、いろいろな人に手伝ってもらいながらさ。

信じてみればいい

ちょっとしたことでケンカして、いつの間にか自然と仲直りして
る。

目まぐるしく変わる感情を整理できてないから、その場しのぎと
いう言い訳で、嘘は勝手にでてくる。

嘘に嘘を塗り重ねて、嘘の終わりは嘘になる。

知らず知らずのうちに垂らした命綱が、そのうち自分の首を絞め
るよ。

言葉にできないなら、無理に言葉になんかしないほうがいい。

目を見ただけで伝わるような、そんな魔法を信じてみればいい。

それなら、誰も傷つかない。

強い絆で結ばれる

気持ちだけが先走って、いまいちうまく動けない。

結果だけがすべてじゃないけど、結果がよけりゃ、とりあえずはいいや。

嫌な事、辛い事があっても、それを乗り越えればそれまで以上に強い絆で結ばれる。

精一杯走ってそれがゴールにまっすぐ続いてるなら、後ろ気にしてるヒマなんかない。

誰かの足元救うよりは、誰かの前で進んでた方がいい。

地を駆ける兎も、夢見ればいつか空翔る竜になれる。

諦めるのは、まだ早かったりするんだ。

新しい日々、新しい自分

新しい日々が始まる。

今までの事全部合わせて、そして新しい自分が作られていく。

昨日までは見向きもしなかったものに、新しい発見を見いだすかもしれない。

世界中が祝福を受けて、そして少しずつ動いていく。

昨日までの霞んだ世界が、喜びで満ち溢れていく。

ボクはどんな今日を過ごすのかは、相変わらずわからないんだけど。

そんな些細なこと楽しみにできるくらい心の余裕ができそう。

さあこれから、どんな出会いがあるんだろう。

青春疾走

今すぐに駆け出そう。

後戻りなんてしては行かない。それがわかっていれば、振り返ることなんてしないはず。

時間は無駄にはできない。

誰かが指を指しているとしても、そんなの気にしなきゃいい話じゃない。

口ずさむその歌は、きっと誰かの希望になる。

いいことばかりある内に、たくさんたくさん笑ってけばいい。

走ってしまつて疲れてる時に、振り返って、来た道を見返すんだ。僕らはいつだって、そうして自分の自信にしていくんだけ。

好きって気持ち

君が得意気に話している。

そんな君を見て、思わずニコニコしているボクがいた。

いつからだろう。こんなに近くににいるのに、何か物足りなく感じてる。

言いたいことがあるほど、言えることが言えないくらい、時間は限られている。

こんなに苦しいのに、それでも地球は回転を止めたい。

君を好きになればなるほど、君の前で素直でいられなくなる。

そんな気持ちを追い払うように、今日も君の笑顔は輝いている。

君を見つめるだけだ。

すぐそばに。

本当は不安なんだよ。

本当はこわいんだよ。

今にも逃げてしまいたくて、震えてるんだよ。

だけど君のその瞳には、強い決意が見えているね。

何かをやるうとするとき、人は強くなれるから。

進め、どこまでも。君の道を。

向かい風に吹かれたって、きつとそこに、憧れたあの日の夢がある。

何もかもが嫌になって、誰も信じられなくなってさ。

だけど、そんな時にこそ、思い出してほしい。

すぐそばに、見えない愛はたくさんあるんだと。

もう届かない

他愛もない話に華を咲かせ、毎晩のように語らう日々。

いつ終わるかもしれないのだから、いつでもいいように準備はしている。

昨日までは想像もしなかったことが、ある日いきなり起きるかもしれない。

その中で何かが弾けるように、人は現実を自覚していく。

もう届かないと知っているうちは絶対に届かないと教えてくれるのは、一体、どこのどなたでしょうか。

自分で気づけなきゃ一生気づけないと、そんな言葉が、ふと、脳裏を過った。

それでいいや。

なにげないことで怒ってみたり、気のないふりしてそっぽ向いたり。

言葉にはしたがらないくせに、曖昧な行動ばかりとっているね。がらくたばかりの青春だって、最後に笑えりやそれだけでいい。求めるのは結果なんかじゃなくて、仲間と過ごしているこの瞬間。昨日笑えなかったなら、今からそのぶん笑えばいいや。

一人で拗ねてる暇があるなら、笑いのタネでも探したがマシさ。そういつぶうに重なってく、そのくらいがちょうどいいや。

世界はまぶしく輝く。

気持ちがかもってるだとか、そんなんが言葉の価値を決めてる。
誰もがカッコつけて名言を笑う時代に、ボクらはどれほどの想いを言葉に託せるのだろう。

見過ごしても、いつか世界は探り当てる。

隠し通せる謎なら、最初から謎として成立してはいない。

誰もが知ってるはずなのに、誰もが知らないふりしてる。

どんなにすばらしい名前があっても、その意味を知らなきゃ文字の羅列でしょう。

その意味を知ったとき、世界はまぶしく輝く。

そしてどつする

たとえば。

走ったら早く進めるよ。

疲れるけど。

歩いて進んだら楽だよ。

時間が惜しくないならね。

毎日どれだけの選択を強いられて生きているのだろう。

最善を選び続けるなんて、一体何人ができているんだろう。

答えが見えないのは怖いことだけど、置いていかれるなはもっと怖い。

だから自棄になって進んでる。じっくり考える大切さを忘れる。

世界は安定性より速効性を望んでる。

だからこそ、考えるべきは別なんじゃないの。

誰かを傷つけるくらいなら

誰かを傷つけるくらいなら、力なんかいらない。

なにかを救える力がなにかを痛め付けるなんて、世界はひどく歪んでいる。

世界中に広められた愛の言葉は、形だけじゃないはずなんだ。

だけど、強い力の前じゃ恐怖に上書きされて、言葉に自由はなくなる。

誰かとともにあるべきなのに、自分から突き放したがる。何がしたいんだろうね。

心の中に未来が見えてるなら、あるべき姿はわかりそうなものな。

少しはまともに成長できるかな。

その輪は、途切れることなく。

いつ始まったかわからないから、いつたいつ終わるのかもわからない。

誰も知ってそんなことこそ、以外と誰も知らない心理だったりする。

目の前に続く道歩くのも結構だけど、先人がいなきゃ道がなかったって事を忘れちゃいけない。

世界は平穏でいたがるけど、本当の平穏を知っている人間なんかいないんだ。

いつか気づく。気づかされる。

それが誰かに伝われば、それは誰かの明日に繋がるでしょう。

その輪は、途切れることなく。

それが幸せ

嘘みたいに聞こえるかもしれない。だけど、本当なんだ。

どんなに辛くても、どんなに痛くても、君が笑ってさえくれば、ボクはそれでいいんだよ。

手を繋ぎたいとか抱きしめたいとか、思わない訳じゃないんだけど。

そんな直接的なことよりも、君の幸せを願ってる方がボクらしいかなって。

君の話に相づちをうちながら、君の話に深く沈んでいく。

その声を深く感じて、また頷いて。

そんなことができれば、ボクはきつとそれだけで幸せ。

好きとか嫌いとか

毎日のちよつとしたふれあい。

そんな時に感じるあなたの体温で、なんだかとろけてしまいそう。言葉なんか何種類もあるけど、言葉にしたらなんかもつたいない。手を繋ぐだけで伝わるのなら、手を繋いでいたい。

できるだけそばでああなたの温もりを独り占めしていたい。

好きとか嫌いとかじゃなくて、もっと深いところから求め合つみたい。

そついうことにも言葉を必要としない、強い強い愛で結ばれていたい。

それは、恋人っていうかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8485z/>

二百文字詩集「虹色交差点」

2012年1月12日21時53分発行